
美しさ。

夢扉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美しや。

【著者名】

夢扉

【Zコード】

Z4584D

【あらすじ】

絶世の美女、夢子が凡人に振られた？！なんと彼には”彼女”がいるらしい。夢子以上の美しさなのか？自分の外見にコンプレックスと自信を抱く女の子の奇妙な恋のお話。

「俺、彼女いるから。」

目の前の男はそれだけ言って立ち去つていった。それほど整っていない顔に少しばかりの嫌悪を浮かべただけの、淡々とした態度だ。こうして夢子の人生初の告白は、人生最大の屈辱を残して終わつた……のだ。

「ゆめーー、どうだつた？ 高野君。」

化粧で素顔を誤魔化した女がニヤニヤしながら尋ねてくる。全くもつて不愉快な問いである。もし今が食事中でなかつたら間違いないく持病の癪癩が爆発していたことであろう。

「あー、どうせあたしや、振られたよ！」

カレーパンを持つ手に力が入る。夢子の声が届いたのか、隣のテーブルの人が息を飲む。あの武久夢子が振られたというゴシップは光の速度で広まつていた。その証拠に我ながら自意識過剰だが、キンパスの至る所で視線を感じる。まあ、視線はいつものことだが、今日に限つてそれは羨望や嫉妬、好意ではなく同情や好奇なのだ。なによりも大嫌いな同情なのだ。

友人で、しかも悪友の中でもうわさ好きの咲子が知らぬはずがない。彼女はまだニヤニヤしながら夢子の顔を覗き込む。あまり魅力的とはいえない上目遣いで。

「彼、同性愛者なのね。」

自分自身のセリフにうけたのか、ニヤニヤがはつきり下品な笑顔に変わる。不愉快だが、咲子の黒目がちの瞳には同情は浮かんでいない。それがせめてもの救いだ。

「そうね、少なくとも彼女はいるらしいから両刀遣いかもね。今日はもう帰る。」

友人の目に驚愕の色が浮かぶのを見届け、夢子はさつと席を立つた。

華奢な体つきに、好ましい身長。顔なんて化粧が必要ないくらい透き通った肌に、猫を思わせる大きな目。すっと通った鼻梁。いたずらっぽく笑う口元。女でさえドキッとさせられる容姿なのである。性格にこそ少し難はあるが、夢子はそれを補つて余りあるほど絶世の美女なのだ。

「夢子を選ばない男がいたなんてねー……」

背筋を伸ばし、しゃんとたたずむ彼女の後姿に見とれて咲子はつぶやいた。

「勇君、どうしたの。」

一週間ぶりに会う彼は、少し上の空だ。いつもはコーヒーに砂糖を4つは入れるのに。今日はブラックで飲んでしまい、少し顔をしかめたのを見逃さなかつた。

「うん、疲れてるのかな。来週ゼミの発表でね。」

やっぱりおかしい。彼はめったに大学の話をしない。私が行きたくても行けなかつたのを知つてから遠慮している。ゼミの話なんて聞いたこともない。彼はめったに感情を表に出さない人なんだから、と言い聞かす。仮になにかあつて動搖しているのに対して、私に話してはくれないだろう。

きのこクリームオムライスになります、ウェイターが静かにプレートを置く。おいしそうなにおいに考えるのを中断した。たっぷりときのこソースのかかつた料理は今が旬である。勇はきのこが大好きだ。

「一口ちょうだい。」

彼の注文したきのこ料理はまだ来ない。許可を待たずに勝手にスプーンを入れる。すうっと、卵をくずす。その丁寧さも、スプーンを持つきれいな指も、私のものになつてから久しかつた。彼が大きめの一口を口に運ぶ。その唇も私のものだ、と恵美は強く願つた。

「来月で、三年になるね。京都に行かない。」

彼の手がとまる。少し顔が輝いたと思うのは、自分に都合がよすぎ

るだろうか。こんな風に感情の乏しい彼から、どんな小さなものも見落とすまいとしたおかげで、わたしは勘の鋭い女となつた。それが仕事にも役立つたわけだが。

「でも、仕事は大丈夫なの？」

ほんの少し感じた落胆を意識しないようにした。彼にはもつと貪欲でいてほしかつた。わがままを、自分を縛つてほしかつた。私の都合を考えずに、自分の気持ちの赴くままに。そんな情熱を望むようになつたのは最近になつてからだ。私の都合を気にする彼を説き伏せて、来月は古都へ紅葉狩りに出かけることになつた。

「今日、この後飲みに行く予定があるの。ごめんなさい、今日は泊まれないわ。」

まだ7時だつた。勇は相変わらずの表情でうなずいた。相手が誰かも聞かなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4584d/>

美しさ。

2011年1月22日14時30分発行